

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720361

研究課題名(和文) 中世教皇庁の行政組織編成に関する実証的研究

研究課題名(英文) A Study on Organizational Systematization of the Medieval Curia

研究代表者

藤崎 衛 (Fujisaki, Mamoru)

東京大学・人文社会系研究科・助教

研究者番号：50503869

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教皇庁の各部局の組織や役人、さらに教皇の身の世話をする奉公人(家人)についてその役割や俸給を記した「教皇庁構成員便覧」とでもいうべき、14世紀初頭成立の文書を検討しつつ、中世中期の教皇庁諸部局及び人員の構成と役割を明らかにした。

なかでも慈善組織をなした施与局と救護院の活動実態と人員編制の解明に重点を置き、大きな特徴として、教皇庁付属の救護院の中には、地理的に頻りに移動を繰り返した教皇庁に付随して移動する救護院が存在した点を強調した。これは他の部局についてもあてはまると考えられ、教皇庁の空間的移動と組織編制のあり方に関係性を見出し、それを検証する意義があることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the structure and role of various departments and personnel of the Roman Curia in the Middle Ages by analyzing a sort of "Curialist Member Handbook", a document which dates to early fourteenth century and describes the role and salary of each department, official, or "familiaris" (servant).

In particular, I have focused on elucidation of actual activity and personnel systematization of charitable organizations, the alms house and hospitals belonging to the medieval papal curia and emphasized the fact that there was characteristically a hospital moving with the papal court which itself was frequently transferred from one place to another. This point of view is to go for also other curial department and it will be meaningful to find out some association between transference of the curia and organizational systematization and examine it.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：教皇庁 中世 ローマ

1. 研究開始当初の背景

(1) 中世ヨーロッパの社会と文化を理解する上でキリスト教についての考察は不可欠であり、そのヒエラルキーにおける最上の機関であるローマ教皇庁は研究の対象とすべきものの一つである。しかしながら、日本の西洋中世史学において教皇庁そのものを扱った研究者は少なく、グレゴリウス改革の研究を展開した野口洋二氏、改革教皇権および同時期の枢機卿団について研究成果を挙げた関口武彦氏、教皇庁における儀礼の問題を扱った甚野尚志氏などに限られている。そのため、これまで中世教皇庁に関する日本語で書かれた学術的基本研究は皆無であったといえてよい。

(2) 私は、中世の教皇庁を二つの側面から、つまり宗教的側面と行政・制度的側面から考察してきた。特に、行政・制度的側面については、12世紀から13世紀にかけての組織編成や税制に関する研究をおこない、平成22年9月に提出した13世紀の教皇庁組織および人員に関する博士論文においては、中世の教皇庁を形づくった組織編成の大枠を提示し、各部局の人的構成と職掌について、それらの変化を追いつつ考察をおこなった。

(3) 当時の世俗権力や各地の教会機関と関係を結び外交的・教会政治的な実務を遂行していたのは「行政組織」にほかならない。本研究ではまさにこの行政組織に焦点を当て、これを構成する諸部局の成立過程の検討、役割、人的構成、スタッフの給養等を考察する。13世紀以前について史料は相対的に少ないとはいえ、この種の研究を進める可能性と必要性が生じるようになった。

2. 研究の目的

本研究の対象は、中世において有力な権力機構の一つであった教皇庁とする。この教皇庁をいくつもの部局から構成される複合体としてとらえ、とくにその行政的組織に焦点を当て、それぞれの部局が成立するにいたった経緯、それぞれに任された職務、および人的構成を、実証的考察をとおして明確にすることにより、王権や皇帝権など世俗権力と比較した場合に看取される特殊性と共通性、中世という時代の特殊性を浮かび上がらせることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 検討対象としていくつかの主要な行政的組織、具体的には、教皇官房、文書局、裁判所、内教院、慈善機関を設定し、年度ごとに一つまたは二つを順次取り上げ、当該組織およびその下位組織の成立過程、役割、人的構成、スタッフの給養について考察を進める。国内でアクセスできないオリジナル史料、刊行史料および研究文献を閲覧するために、おもにイタリアの文書館や研究機関を訪問す

る。上記の諸組織について研究成果をまとめ、学会発表や論文の形で公表する。

(2) 特に慈善機関の研究に力を注ぎ、施与局および救護院の性格が13世紀初頭を境に変化したという見通しを立て、先行研究の成果を踏まえつつ両組織の役割とスタッフの給養の実態を明らかにする。移動する教皇に随伴した聖アントニウス救護院については、とりわけ詳細に検討する。

4. 研究成果

(1) 研究機関の当初は、主に先行研究および研究動向の調査に取り組んだ。その結果、近年中世教皇庁の行政組織の研究において関心が寄せられている時期は中世後期であり、プロソポグラフィ的な手法が取られる傾向にあることを明らかにした。

(2) このような状況を踏まえて、具体的な組織の解明を進めた。特に、教皇庁内の慈善組織に関する研究において論文の形で成果を上げるとともに、中世の教皇庁研究の歴史学的意義についての論考を発表することができた。これは文献史料の収集と読解、およびイタリア中部における現地調査の積み重ねが実ったものであり、先行研究と近年の研究動向を踏まえたものである。

(3) 「中世教皇庁の慈善施設—施与局と救護院」『地中海学研究』XXXV号(2012年)75-94頁において、教皇庁がイタリアのローマからフランスのアヴィニョンに移転する14世紀初頭までの教皇庁の慈善組織として、施与局と救護院を取り上げて考察を加えた。貧者に施しをする施与活動自体はキリスト教の歴史と同じだけの歴史があるはずだが、専門化された組織とスタッフが明確に史料に現れるのはインノケンティウス3世(在位1198-1216年)の頃からである。この組織が独自の会計管理を行っていた点などを浮かび上がらせた。他方で、13世紀に教皇庁に直属する救護院としてローマの聖霊救護院と移動する教皇庁につねに伴った聖アントニウス救護院などを取り上げて、その活動スタッフの給養の実態の解明を行った。

(4) また、「ヨーロッパ中世における教皇庁の成立と発展」『歴史と地理』第661号(世界史の研究 234号)(2013年2月)54-58頁において、組織としての教皇庁が姿を現したのが、古代ローマ世界ではなく中世においてであったことを論じた。枢機卿団や諸部局の形成といった組織化の進展の様子とその背景、研究の展望を記した。

(5) そして、本研究の総括の一部をなすのが、平成25年12月に上梓した『中世教皇庁の成立と展開』である。これは博士論文をもとにしつつ、本研究課題に取り組むことによって

得られた知見を数多く追加して完成させたものである。教皇庁の各部局の組織や役人、教皇の身边を世話する奉公人（家人）について、その役割や俸給を記した文書「教皇庁構成員便覧」を校訂のうえ分析することで、13世紀を中心とする中世中期の教皇庁組織のほぼ全貌を明らかにすることができたといっている。ここでは、教皇庁の空間的移動と組織・制度の変化とのかわりについても追及し、両者の間に密接な関連性があることを確認することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

藤崎衛(インタビュー記事)「祈りの地・パチカンへの道しるべ」『旅なかま』245号、査読無、2013年、2-4頁

藤崎衛(翻訳)「マリア・ジュゼッピーナ・ムツァレリ「ポローニャのゲッター」」『クリオ』第27号、査読無、2013年、65-75頁

藤崎衛「ローマ教皇の交代 カトリックの体制立て直せるか」『東京大学新聞』2013年4月23日、査読無、2013年、7頁

藤崎衛「ローマ法王 聖・俗、二つの顔のあいだで」『朝日新聞』2013年3月17日、査読無、2013年、11頁

藤崎衛「ヨーロッパ中世における教皇庁の成立と発展」『歴史と地理』第661号(世界史の研究234号)、査読無、2013年、54-58頁

藤崎衛「13世紀教皇庁における慈善施設 施与局と救護院」『地中海学研究』第35号、2012年、75-93頁

藤崎衛(書評)「ジャン=クロード・シュミット『中世の幽霊 西欧社会における生者と死者』(みすず書房 2010年)」『DALS ニュースレター』第31号、査読無、2012年、15頁

藤崎衛(書評)「Gianluca Raccagni, *The Lombard League 1167-1225*, Oxford 2010」『西洋中世研究』第3号、査読無、2011年、202頁

藤崎衛(書評)「Agostino Paravicini Bagliani, *Il Papato nel secolo XIII. Cent'anni di bibliografia (1875-2009)*, Firenze 2010」『西洋中世研究』第3号、2011年、査読無、201-202頁

藤崎衛(書評)「Thomas Haye, *Päpste und Poeten Die mittelalterliche Kurie als Objekt und Förderer panegyrischer Dichtung*, Berlin 2009」『西洋中世研究』第3号、2011年、査読無、189-190頁

藤崎衛(翻訳)「ミケーレ・パッチ「中世後期イタリアにおける聖なる語り、聖なるモノと幻視体験」」『死生学研究』第

16号、2011年、査読無、201-215頁
藤崎衛「十三世紀における教皇庁役人および教皇家人に関する研究」、東京大学大学院人文社会系研究科博士学位論文、査読有、2011年、総393頁

藤崎衛「中世教皇庁のユダヤ人観 排除か受容か」『地中海学会月報』第341号、査読無、2011年、7頁

[学会発表](計6件)

藤崎衛「教皇使節活動の意図と実態

12、13世紀を中心に」、九州史学会、2013年12月8日、九州大学(福岡)

藤崎衛「中世ローマの都市空間」、都市史研究会・合同沼地研究会、2013年6月20日、東京大学(東京)

藤崎衛「聖俗の支配者としてのローマ教皇 中世ヨーロッパを読み解く鍵として」、地中海学会春期連続講演会「地中海世界を生きる」第1回、2013年4月6日、ブリヂストン美術館ホール(東京)

Mamoru Fujisaki, "Comment on Maria Giuseppina Muzzarelli, "The Bologna Ghetto"", 第34回関西イタリア史研究会、2012年12月2日、京都大学(京都)

Mamoru Fujisaki, "Comment on Toshiyuki Chiba, "Conversion in Form of *reductio*. The Church Union at the Council of Ferrara-Florence (1438-39)""", International Symposium "Religious Conflict, Religious Concord in Europe and the Mediterranean World", 2011年10月21日、東京大学(東京)

藤崎衛「中世教皇庁のユダヤ人観 排除か受容か」、地中海学会定例研究会、2011年4月23日、東京藝術大学(東京)

[図書](計5件)

藤崎衛『中世教皇庁の成立と展開』、八坂書房、2013年、総xii+392+162頁

青木康、池田嘉郎、藤崎衛ほか37名『世界史B 世界史教授資料 研究編』、山川出版社、2013年、総486頁、127-170頁

(高山博、成川岳大、仲田公輔との共著)
木畑洋一、相田洋、藤崎衛ほか40名『世界史B 教授用指導書』、実教出版、2013年、総271頁、79-97頁(小澤実との共著)
藤崎衛(翻訳)ジェフリー・バラクロウ『中世教皇史』、八坂書房、2012年、総339+34頁
塩野七生、石鍋真澄、藤崎衛『ヴァチカン物語』、新潮社、2011年、総141頁、46-49頁、92-95頁、136-141頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://fujisaki.main.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤崎 衛 (FUJISAKI, Mamoru)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号：50503869